

令和 5 年度

第 2 回海老名市総合教育会議

海老名市総合教育会議 会議録
(令和5年度 第3回)

- | | | | | | |
|---|-------|--|-------|---------------|-------|
| 1 | 日 付 | 令和5年11月25日(土) | | | |
| 2 | 場 所 | 神奈川県立海老名高等学校 | | | |
| 3 | 出 席 者 | 市長 | 内野 優 | 教育長 | 伊藤 文康 |
| | | 教育委員 | 平井 照江 | 教育委員 | 海野 望 |
| | | 教育委員 | 濱田 望 | 教育委員 | 武井 哲也 |
| 4 | 事 務 局 | 理事(教育担当) | 小宮 洋子 | 教育部長 | 中込 明宏 |
| | | 教育部次長 | 江下 裕隆 | 教育部参事兼教育総務課長 | 西海 幸弘 |
| | | 教育部参事兼就学支援課長兼指導主事 | 山田 圭 | 就学支援課学校給食担当課長 | 山崎 淳 |
| | | 就学支援課健康給食係長 | 加藤 謙次 | 学び支援課長 | 松本 晃子 |
| | | 学び支援課主幹兼係長 | 中島 裕子 | | |
| 5 | 開会時刻 | 午前10時00分 | | | |
| 6 | 協議事項 | (1) 保護者負担経費軽減策の充実
(2) ライフ・スタディサポートの推進
(3) 特色ある図書館運営の推進 | | | |
| 7 | 閉会時刻 | 午前11時45分 | | | |

○教育部次長 それでは、皆様、おはようございます。定刻になりましたので、ただいまより、令和5年度第2回海老名市総合教育会議を開会いたします。

本日、司会を務めさせていただきます海老名市教育委員会教育部次長の江下と申します。

今回は、この総合教育会議を初めて県立高校、こちら県立中央農業高校さんで開催することとなりました。高校生も交えていろいろな意見を聞かせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

会議開催に先立ちまして、配付資料の確認をさせていただきます。ご用意いたしました資料は、A4の本日の会議次第とツーアップで印刷されました協議事項資料、中央農業高校さん作成資料と中央農業高校さんの高校パンフレットの4点でございます。過不足等はないでしょうか。

なお、協議事項資料につきましては、会場左側スクリーンにも投影してございます。こちらもご覧いただければと思います。

また、先ほどアナウンスさせていただきましたが、全体を通しまして海老名市ユーチューブチャンネルにてライブ配信しております。ご了承いただければと思います。

それでは、会議に移らせていただきます。

進行につきましては、お配りしております次第に基づき進めさせていただきます。

本日の会議の流れですが、第1部としまして協議事項2件、その後、休憩を挟みまして、第2部として中央農業高校の生徒の皆様による学校紹介などを発表していただきます。

それでは、次第2、挨拶でございます。海老名市長と海老名市教育委員会教育長からご挨拶申し上げます。

内野市長、よろしくお願いいたします。

○内野市長 おはようございます。本日は、令和5年度第2回の海老名市総合教育会議、中央農業高校の教室を借りて実施をします。初めてのことでありまして、感謝を申し上げたいと思います。そういった関係では、第2部では中央農業高校の皆さんからお話があるという話で楽しみにしております。

つい最近、ショックなことがありまして、群馬の太田市と私どもは文化、芸術、スポーツの交流を結ぶという協定を結んでいます。子どもたちと交流をしたり、あるいは災害協定も結んでおりまして、太田市はつい最近、オープンハウスアリーナ太田というバスケッ

トのプロが試合できる体育館を造りました。総工費85億円であります。素晴らしい会場になりまして、市民会館も60数億円で1500人が入れる会館を造っておりますが、そのオープンハウスアリーナ太田というのは、オープンハウスというのは、オープンハウセとか、宣伝しているのではないですか。あの会社の社長が太田市の出身で、ふるさと納税を20億円納税したそうです。海老名もそういう人がいれば良いなと思っています。

そこで、うちの中学生と向こうの中学生在交流試合を行いまして、終わった後に夕方、交流会があったのですが、向こうの司会者が市長の名前を知っていますかと言ったら、中学3年生に知りませんと言われて、すごくショックでした。20年も在職していてこうなのだなと思います。私は、内野優といいます。どうかよろしく願いいたします。覚えてください。そういう話ではないですね。雑談になりましたが。

私どもは、今、子どもたちの関係でいろんなことに取り組んでおりまして、今回も人の命を守るということで、学校で桜の木が相当枯れていて、倒れそうというものが70本ぐらいありまして、それを伐採する費用も、チェーンソーで切れば良いわけではなくて、皆さんもそういった経験があると思いますが、伐採すると1本55万円かかります。七十何本やると相当なお金がかかりますが、早急に対応したいと思います。

それから、学校給食関係が、中学校は来年から本格実施でやりますが、小学校では物価高騰で相当食材が上がっていますので、その部分の負担軽減対策を行います。

もう1つは、ちょうど10月から、今まではコロナでしたが、これからの秋はインフルエンザが絶対に流行すると言われていいますので、中学校3年生は1000円で予防接種できるよう助成を行っていますが、中学校1・2年生も含んで、1000円でインフルエンザの予防接種が打てるようにするという形で動いています。これは、中学校生活で感染をしないようにしていただきたいという形で動いています。

海老名も子どもたちの関係で様々に取り組んでおりますので、どうかこれからも中央農業高校の皆さん、ここに通っているわけでありましたが、つい最近、シェアサイクルも出ておりまして、学校へ遅刻寸前の人はシェアサイクルでここに来ればオーケーになりますので、使っていただければと思います。学校は何と言うか分かりませんが。あのシェアサイクルも県下いろいろなところでやったのですが、海老名が収益が一番だと言われていいます。それだけ皆さんの行動範囲が広がっていてよかったことなのだと思いますが、今後、シェアサイクルはどんどん多くなると思います。高校生の皆さんにも多く使っていただければと思っています。

今日は短い時間ではありますが、どうかよろしくお願い申し上げます。

○教育部次長 内野市長、ありがとうございました。

続きまして、伊藤教育長、よろしくお願いします。

○伊藤教育長 おはようございます。中央農業高校の生徒の皆さん、8名の方、どうもありがとうございます。これは総合教育会議とって、実を言うと、市長さんと私ども教育委員会の5人が人々、公衆の面前で教育や市のことについて話し合って、その決めている様子、または話合いの様子を皆さんに聞いてもらうというのが趣旨なのです。そういう中で、市長も去年、その前あたりから若い人たちの声を聞きたいということがありました。これまでの総合教育会議では、小学校、中学校、19校、海老名にはあるのですが、その学校が全てここに参加して、子どもたちが自分たちの学校紹介等をしたのです。

その後に私は考えて、今年はどうしようといったら、でも、市内に県立高校が3つあるから、何とか県立高校にお願いして、県立高校を会場にして、海老名高校、有馬高校の子どもたちにそこに来てもらって、様々な学校紹介等、自分たちがふだん、将来のこと、また、自分で海老名市のことで考えていること、または自分たちの活動として、こういうことをアピールしたいということがあったら、そこで話して、声を出してもらおうかなという機会が中央農業高校に相談させていただきました。そうしたら、校長先生等と話す中で、それを受け入れていただいたということで、今日この場が設定されて、私は本当によかったなと思っています。また次の海老名高校、有馬高校もどうなるかすごく楽しみにしています。

多くの方が今日はいらっしゃっていますが、今日、来てよかったと思うのは、この後帰るときに、玄関のところで、ここで採れた卵とか野菜がすごく安く売られるということです。ぜひそれをご利用いただければなと思っています。

この短い時間で中央農業高校の子どもたちと良い時間が過ごせればなと思います。最初の部分は、最初の本体の会議になるので、海老名市はこういう教育をしますという教育大綱があって、そこでの今の取組について、事務局というか、教育委員会が説明して、それを我々は話し合う時間があります。そこは皆さんに直接関係ないですが、それは違うということがあれば、ぜひ手を挙げて言っていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは、皆さん、よろしくお願いいたします。

○教育部次長 伊藤教育長、ありがとうございました。

それでは、次第3の協議事項に入りたいと思います。今回の協議事項ですが、令和5年度からスタートいたしました新しい教育大綱、5つの柱のうち、えびなっ子しあわせプランの推進の中から授業改善の実践について、そしてもう1つ、包摂性の高い教育的・社会的支援の推進の中からインクルーシブ教育の推進についてを取り上げさせていただきました。

それでは、これからの協議事項の進行につきましては、本会議設置者でございます内野市長に議長をお願いしたいと思います。

内野市長、よろしくお願いいたします。

○内野市長 それでは、協議事項の（1）**授業改善の実践**を議題とします。

事務局から説明をお願いいたします。

○教育支援課長 おはようございます。教育支援課、麻生と申します。

私からは、1番目の議題についてご説明をさせていただきます。

今ありましたが、本年度、令和5年4月からの4年間で計画されている海老名市教育大綱、教育施策の5つの柱の一つに、「えびなっ子しあわせプラン」の推進を掲げております。えびなっ子しあわせプランと申しますのは、海老名の子どもたちが今、学校で生き生きと学習、生活するために、将来自己実現を果たし、社会の一員として幸せに生きることを目指して、家庭、地域、学校、行政が力を合わせて取り組む教育計画でございます。

その中の1つに授業改善の実践を位置づけており、海老名市内の教員が授業を工夫、改善していく取組を教育委員会としては推進しているところでございます。

こちらがえびなっ子しあわせプラン第1期、平成26年から第3期、今年度、令和5年度までの歩みを示したものとなります。それぞれの第2期から第3期における取組について、詳細をご説明いたします。

まず、第1期でございます。第1期には、市立小中学校の教職員から成る「授業改善の手引き」作成に委員会を立ち上げ、平成27年度に「授業改善の手引き」に当たる「よりよい授業づくりのための66のポイント」というものを作成いたしました。私は手元に現物を持っていますが、こういった冊子を作成いたしましたところでございます。

そして、その後、平成29年には、「子どもと教師が笑顔になる！授業展開20のポイント」というところで、先ほどの冊子のダイジェスト版といいますか、ハンディー版という形で、ここの手元にありますが、小さい形で、いつでも先生が持ち歩いて教室などでも活

用できるようにというところで、さらにポイントを絞った冊子を作成したところでございます。

続いて、第2期でございますが、市立小中学校の教職員から成る授業改善実践推進委員会を組織しまして、海老名市の教員がめざす授業として、「子どもの視点に立った授業」をテーマに掲げ、主体的な学び、対話的な学び、深い学びをキーワードに授業改善の体制の取組を推進するとともに、授業実践事例を集め、教職員に公開、共有して参考にできるようにしております。

こういった実際に教員が授業を行った先進的な取組を1枚のシートにまとめて、教職員に配信しています。市内の教職員が通常使っている校務支援システムという職員誰もが立ち上げるパソコンがあるのですが、そちらのほうに配信して、すぐに共有、活用できるような工夫をしているところでございます。

続きまして、平成30年度からは重点施策として「授業改善」を掲げ、全教員で「よりよい授業づくり」に取り組んでおります。小学校では令和2年度より、中学校では令和3年度より全面実施となった平成29年改訂の学習指導要領で示された主体的・対話的で深い学びを実現するために、当時、文部科学省視学官として学習指導要領改訂に携わり、現在は國學院大学の教授である田村学先生をお招きし、市内小中学校教員の授業を実際に参観していただき、ご指導いただくという授業改善に向けた取組を実施しているところでございます。

今ご説明申し上げました田村学先生によるよりよい授業づくりの特別版、及びそれより前の平成27年度から実施しております私ども教育委員会の指導主事が学校を訪問し、授業参観後に、実際に授業を行った先生方とその授業について語り合うよりよい授業づくりのための学校訪問（通常版）というのも実施しておりまして、その表にありますように、これまでに通常版では延べ66の小中学校、特別版では延べ20の小中学校を訪問し、授業改善に向けて取組を実施してきたところでございます。

田村先生にご指導いただく特別版については、今年度で一通り、市内の全小中学校を実施し終わるというところで、一区切りついたところで、次年度以降も田村先生のお力を借りて授業改善に取り組めるように計画しているところでございます。

そして、今年度最終年である第3期におきましては、教育大綱で示された「誰ひとり取り残さない教育」を目指した取組を行ってまいります。市内全小中学校の教員と指導主事23名で構成される授業改善実践推進委員会を立ち上げ、その取組の狙いを「個別最適な学

び」を全員に保証するための授業改善とし、2つの重点を設定しております。

1つ目は、文部科学省の有識者による会議である中央教育審議会の答申で示された個別最適な学びと協働的な学びを研究することです。平成29年度に作成した、先ほど現物をお示ししましたが、20のポイントの冊子を、今申し上げました個別最適な学びと協働的な学びの2つの視点で見直し、改定する、そういった取組をしているところでございます。

もう1点の重点として、小中一貫を踏まえた授業改善を行っております。中学校区ごとに小中学校の教職員が互いに授業参観等を行い、授業に対して意見交換を行うなどして、小中9年間を見通した授業改善を目指して取り組んでおります。今後も海老名の子どもたちが学校で生き生きと学習、生活するために、また、将来、自己実現を果たし、社会の一員として幸せに生きることを目指して取組を継続してまいります。

以上で、授業改善の実践に関するご説明を終わります。ありがとうございました。

○内野市長 ただいま事務局から1点目の授業改善の実践について説明がありました。各委員の皆さんからご質問をお願いいたします。

○武井委員 この中で「よりよい授業づくり学校訪問」の実施とあるのですが、学校の先生の学校内での研究、ひびきなんかもそうなのですが、そういった中で学校訪問の回数とかは、年々この回数になっているのですが、一番効果的な、例えば、この回数を倍に増やすとか、もう少し抑えたほうが良いとか、そういった経過を知りたいのが1つと、もう1点ありまして、今日は中央農業高校の生徒さんがいらっしゃいますので、授業改善実施推進委員会が行っています子どもの視点に立った授業の中で、上から2番目の子どもの学習意欲を引き出す工夫というところを、せっかくなので教えていただければと思います。

○教育支援課長 1点目の訪問の回数等についてですが、私どもの教育支援課指導係の指導主事の人数と、あと学校の人数等を確認しながら、より効果的に指導が行えるように調整しているところなのですが、どうしても物理的に訪問できる回数というのは限られてまいりますので、そのあたりは、全ての要望に応じるという部分は難しいかと思うのですが、できる限りの効果を上げられるように取り組んでいるところでございます。

授業改善の2点目について。

○佐藤指導主事 子どもの学習意欲を引き出す工夫という点についてお答えいたします。教育支援課の佐藤です。よろしくお願いいたします。

子どもの学習意欲を引き出す工夫については、よりよい授業づくりのための学校訪問

（特別版）においても田村先生のご指導をいただいております。まずは１点目として、教師の発問授業の中で中心となる発問をどう気にしていくのか、また、１人１人の発問に対して子どもたちがどう反応したか、子どもたちの反応、子どもの意見、つぶやきを丁寧に拾い、それを見取り、分析し、次の学習につなげていくことで、子どもが次に向かう学習意欲を持つというところを大切に組み込んでおります。

○武井委員 積極的に取り組んでいただきたいと思います。

○海野委員 海野です。よろしくお願いします。最後のほうの狙いの中に、「個別最適な学び」を全員に保証とありますが、授業改善ということで、授業の中で個別にというのは難しいと思うのですが、具体的にどんな対応を考えていらっしゃるのかを教えてください。お願いします。

○徳山指導主事 教育支援課の徳山です。

個別最適な学びということで、本当に簡単な言葉で言えば、子どもたちのやりたいことができるということなのかなと思っています。ただ、授業としては30人から35人程度のクラス、子どもたちがいる中で教師が基本的には１人で指導するということで、その難しさはあるかなと思いますが、例えば、１つのテーマを設定したときに、子どもたち１人１人の興味関心に沿って調べていくなどの授業展開を教師側が用意していく、それから、様々な学び方ができますので、例えば、今、１人１台端末で調べていくですとか、端末以外にも書籍から調べるなど、そのあたりの学習展開を広く教師が準備することで対応していけると考えています。

○海野委員 ありがとうございます。

子どもたちの個々の意見をなるべく取り残さないように対応していただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

○濱田委員 このえびなっ子しあわせプランは、平成26年から、そんなに長い期間ではないので、改善、改善ということで授業改善に向けての取組が非常にコンパクトに、非常にスピーディーに、あるいは急激にという言い方が適切かもしれませんが、非常に変化をしているのではないかと感じたのですが、授業改善といえ、これから先も、止まることなく続けていかなければならないような感覚を受けています。そういう中で、本年度の重点の中に小中一貫を踏まえた授業改善というものがございますが、小学校と中学校がリンクしていくというのは非常によく分かるのですが、例えば、今日はたまたま高校の会場で行っていますが、中学校から高校へのつながりとか、逆に幼稚園とか保育園からの小学校へ

のつながりとか、そういうところも当然工夫されているのかなと思うのですが、何かそういうところで考慮するところがありましたらご説明いただければと思います。

○教育支援課長 1点目の中と高のつながりというところなのですが、今、高校生が目の前にいらっしゃるので、中から高の進路選択というところでそれぞれ自分の興味関心に沿った進路を選択していくわけですので、進学先も私立、公立、そして県内、県外と幅広くなるので、なかなか直接的な結びつき、接続というのは難しい部分もありますが、当然、進学先との書類のやり取りとか、場合によっては、高校に入学した後に出身中学校に聞いて、その生徒それぞれの情報交換をするようなことは日常的に行っておりますので、その子1人ずつが安心して高校生活が始められるような取組はしているところでございます。

小学校の前の幼稚園、保育園と小学校の接続については、担当が来ておりますので、こちらから説明させていただきます。

○佐藤指導主事 幼稚園、保育所等の幼保小連携というところにつきましては、昨年度より架け橋プログラムの推進というところで教育委員会として取り組んでおります。幼稚園、保育園等で育ってきた年長さんの5歳児と小学校1年生の2年間を架け橋期として、こちらの接続、子どもたちが幼稚園、保育所等で身につけてきた力を生かしながらスムーズに小学校生活に移行していけるようにというところで、幼児教育の先生方と小学校の先生方とで子どもたちの学びというものの連携を図っております。

具体的には、今年度、架け橋プログラムに関わる3つの会議を設定しております。1つ目といたしましては、架け橋プログラム推進協議会といたしまして、市役所の中でも、行政の中でも保育・幼稚園課と教育支援課、そして幼稚園、公立保育園、それから、民間の保育所、認定こども園の園長先生方、PTAの代表の方にお集まりいただきまして、接続について話し合う協議会の場を設定しております。それ以外にも、平成27年度から続けております幼保小中連絡協議会というところで中学校区ごとに園の先生方と小学校の先生方、中学校の先生方にお集まりいただき、子どもたちの具体的な日々の姿に沿って協議する場を設けております。

もう1点といたしましては、架け橋プログラム検討委員会として、小学校1年生の先生方にお集まりいただき、1年生の学習カリキュラムについて、よりよいカリキュラムづくりというところで検討していく場を設け、今年度から具体的に取組を進めているところでございます。

○濱田委員 ありがとうございます。まだまだ小中一貫といっても9年間だけ、人生の中

でたった9年間かもしれませんが、非常に濃いこれからの授業改善を通じて、小中9年間の子どもたちの学びと生活を、学校を通じて守っていただければと思いますので、よろしくをお願いいたします。ありがとうございました。

○平井委員 今回、狙いとして挙げられている個別最適な学び、子どもも望んでいるし、教師も最適な学びをさせてあげたいという思いは変わらないと思うのです。そのために海老名市では、ずっと授業改善に力を入れてきているという、これは大変素晴らしいことだなというふうに思います。そして、狙いがはっきりされていること、これを基に各先生たちがしっかりと授業改善に取り組んでくださったら良いかなというふうに思います。

よりよい授業づくりに欠かせないのが、1つとして、各学校で取り組んでいる校内研究だと思います。今、海老名市全体、小中合わせて校内研究がどのように行われているのか、一部で良いので、そのあたりをお聞かせいただけたらと思います。

○教育支援課長 校内研究についてでございます。今日は何人か校長先生方も参加されているところでのご説明になるのですが、例えば、この中央農業高校さんの近隣の有鹿小学校では、今年度、テーマとして「伝え合い、認め合い、学びを楽しめる子の育成」というところで、国語科を中心とした研究に取り組んでいるという報告が上がっております。あと、近くの中新田小学校は、「主体的に考え、共に学び合う児童の育成をめざして」というところで、算数科における共同学習をテーマに研究に取り組むというところでございます。

中学校では、海西中学校は「人間関係づくりに生きる主体的・対話的で深い学びの研究」というところで、私も海西中に勤めていたことがあります。長年、海西中学校は、とにかく人間関係づくりと授業づくりが両輪になるという意識で子どもたちの人間関係づくりに重点を置いた取組をずっと継続して研究しているところでございます。

幾つかの例ですが、以上です。

○平井委員 各学校でそれぞれのテーマを決めて取り組んでくださっていることは大変良いと思います。それが日々の中で生かされ、そして、今回も授業展開20のポイントというのが出ておりますので、それらを活用して、現在、若い先生方が多いですから、できるだけそういう20のポイント等の展開を活用して授業づくりにしていただけたら良いかなというふうに思います。それは、学校も主導的に管理職等が進めていくべきだと思いますが、教育委員会としても、そこを支援する、サポートする、そういう体制をぜひ充実していただきたいと思います。

○内野市長 教育内容についてではなくて、この頃、感じることは、学校だけで1つのものが完結できるのかと深く考えています。例えば、iPadが国からのので全部の生徒に行きました。皆さんと違って、今、小学校は全部iPadです。高校もあるのかな。数年後に全部入れ替えないといけないという予算はどうするのだという問題がありまして、5億円のお金を一遍に市が出せるか出せないかというのはすごく問題なのです。

海老名市は、本当に財政力が良いので、綾瀬とか座間国のお金がある程度来る。海老名は全然来ないので、5億円を持ち出ししないといけない。そこで今、いろんな関係で国に要望しているのですが、それとは別なのですが、iPadの問題で、つい最近、太田に行ったときにこういうことを言っていました。iPadも学校の先生によって教え方が、プログラムを組むのが全然違う。そこで考え出したのが、土日、子どもたちが学びたい時間を選んで、教育委員会が予習というか、そういった教室を設けるそうです。教室を設けると、その中の集まった子どもたちは上級の部分ができる、中級の部分、初級の部分、そういうのを分けて、レベルがあるそうなのです。それをやったら、ものすごく募集が来ていて、抽せんになる可能性があるという話があつて。私は思うのですが、予算編成の最高責任者ですから、学校内でこういうことをやるということの限度があつたときに、学校を離れて、市役所の会議室でも良いし、いろんなコミセンがあるのですが、そういったものも今後考えていかないと、全てが金太郎飴でやると、上級の人は上級で、伸びないのではないか思うのです。

そういった部分を少し今後、新しい授業形態の中で、ここまでは学校は良いのですが、その後の関係は別枠で設けるようなシステムを考えていくということが必要だなと思っています。これは1つの意見なので、ここで答弁は、同じ職員ですから要りませんが、私はそう思っていますので、今後、来年に向けて何か特色あるものを行ったほうが良い。

それはなぜかという、国が今回、言ったではないですか。今日の新聞でもありましたが、フリースクールに対して相当お金を費やす、支援する。不登校の子どもたちが居場所がないので、そういった居場所をつくった場合、補助金が相当出るらしいのです。だから、授業もiPadでできるように、そのiPadとか、それについているLANのシステムを国が補助金をきちんと出すと、今回出ていましたが、確定していませんが、そういった部分でいくと、どんどん多様性で変わりつつありますから、それに追いつくような体制づくりを行っていただきたいと思います。

予算が認められるか、認められないかは別の話ですから、一応意見として申し上げます。

す。市長がそう言ったから予算をつくりましたといっても認められない場合もありますので、よろしくお願いしたいと思います。

これについて、皆さんから何かありますか。良いですか。高校生にとってはあれですよ。そういったことで、学校の先生は一生懸命授業を行っているのですよ。そういったことを理解していただければ。いい加減にしている先生はいませんから。中央農業高校は分からないですが、海老名はそういうことはないから。

○内野市長 それでは、**2番目のインクルーシブ教育の推進**、これは本当に言いにくいのだよね。広めるならもっと単純明快な言葉が一番良いのに、本当に言いにくい。どこで切って良いか分からない。私は横文字が嫌いなので。よろしくお願いします。

○教育支援担当課長 教育支援課の浅井です。よろしくお願いします。

私のことなのですが、私は中新田小学校で勤務しておりまして、1年生を連れて中央農業高校さんに遠足に来ていて、前日もブタさんのお世話とか、そういうところをたくさん見せていただいて、そのことを思い出しました。もし中新田小学校の子たちが来ていたら、よろしくお願いしますね。

私からは、インクルーシブ教育についてお話をさせていただきます。よろしくお願いします。

こちらについて、えびなっこ支援シートというものと、インクルーシブルームということを中心にしているのですが、それについて説明をさせていただきます。

データはスライドが多いのでスクリーンを見ていただいたほうが、もしかしたら分かりやすいかもしれません。

グラフを4つ挙げます。1つ目は、支援級に在籍しているお子さんたちの数で、ここ10年で2倍になっている。とても増えているというところが、このグラフです。

次は、通常級に在籍する言語ですとか情緒の通級教室に通うお子さんたちの数も1.6倍から3.6倍、非常に増えているというところが、このデータからも示しているとおり、海老名市は子どもたちの数はここ10年でほぼ横ばいではあるのですが、支援教育のニーズは非常に増えているというところが、まず前段として話させていただきます。

では、本題に入ります。

まず、えびなっこ支援シートの活用について、こちらは各教室にいる、スクリーンにある、これが1つの教室と捉えると、皆さん1人1人、色がある、個性があるわけです。そ

の支援が必要なお子さんたちに1人1人個別の支援計画を保護者さんと一緒に作成するためのシートであります。

こちらを見ていただくと分かるのですが、この赤丸で囲んだ学齢期における切れ目のない教育支援の実施計画という部分がかかれていまして、年間で見ていきますと、まず、1学期の最初にお子さんの支援を、まず学校が考えていきます。そして次に、保護者さんと一緒に、では、お子さんの支援をどういうふうにしていきましょうかということ、このシートを使って考えていきます。そして、実際に支援が始まります。

支援が始まる時に、このシートは各関係機関の方々とも共有していくものになります。さらに、最後、こちらは、1年間の支援がどうであったか評価し、また、その課題で来年度以降どうしていこうかということを校内、または保護者の方々と一緒に話をしていくものであります。

このシートは、プロフィールシートとえびなっこ支援シートという2枚あるのですが、このシートをつくるのが目的というよりは、このシートを介してお子さんの支援について家庭と学校と、そして関わる方々で共に考えていこうというツールになるもので計画をしています。令和6年度から本格実施をしていくところですので、よろしくをお願いします。

次のテーマです。インクルーシブルームの設置についてです。

こちらは、先ほどと同じ教室のアニメを使っていくのですが、このお子さんへの支援を考えていきます。このお子さんは、ふだんは教室で過ごせるのですが、少ししんどくなったときに45分間か1時間、ほかの部屋でクールダウンすることができるような、このようにインクルーシブルームで1時間を過ごし、そこで支援員さんとマンツーマンで学習をして、心が落ち着いたら教室に戻って、また次の授業に取り組んでいくという支援です。

次は、不登校のお子さんです。この不登校のお子さんに対しての支援を考えます。教室に行くのはなかなか難しいですし、朝一番から学校に通うことも難しいので、まず最初、このお子さんはインクルーシブルームに通ってきます。そこで、まずは午前中頑張ってみよう、できるようだったら、今度は給食も食べてみよう、そして、午後もチャレンジしてみよう、授業に1個出てみようかなと思います。教室復帰をショートステップで考えていくときに、教室の様子もこういうふうにICT機器を使って授業配信をしながら安心感を与えていって、教室復帰を狙っていけるような教室になっていくのではないかと思います。

ということは、このお部屋は、やはりお子さんたちがすごく過ごしやすい環境を整える

ことが大事で、今年度、有馬小学校、今泉小学校、東柏ヶ谷小学校がこの研究推進校になっていまして、どうすればお子さんたちが気持ちよく過ごすことができるかなという工夫をしているのです。このようにパーティションを使ったり、あるいは部屋を2つに分けて勉強部屋と憩いの場所と分けたり、こちらは校長室にあったソファをこの部屋に持ってきたり、お子さんが本当に過ごしやすい、安心して、そのお子さんの特性に合った過ごしやすいお部屋をつくっているところであります。

ここからは、これから先の目指す話をしたいと思います。地域に住むお子さんたちは、ここに書いてあるとおり、通常の学級に移行するお子さんもいれば、支援級に行くお子さんもいます。そして、えびな支援学校のような県立の支援学校に行くお子さんもいるのですが、スクリーンを見ていただくと、このお子さんたちが皆、普通の教室に所属することができればと思います。そして、例えば1時間目はこのように通級教室に通う、2時間目はこのように、この子たちは通級教室に通う、そして3、4時間目はみんな同じ教室で過ごし、そして、みんなで給食を食べたり、休み時間を一緒に過ごせたり、そういうようなインクルーシブのような教育を目指すことができる場というところで、今後研究を進めていきたいと考えているところであります。「ともに学び」「ともに育つ」、そのような学校をつくっていくことができればと、今後も研究を進めてまいりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

○内野市長 どうでしょうか。

○武井委員 データ上ですと、年々増えてしまって、支援教育の人数という表現は少しよろしくないかなと思っていて、そういった中で、先ほどのインクルーシブルームとか、パーティションは、子どもたちがもう1回、普通学級に戻れるようなプロジェクトだと思っていて、こういった取組を行っていくことが、これからいろんな多様性の中で普通教室にも通えるようになるのかなと感じました。

そういった中で、増え続ける支援級の人たちを、これも通常級に戻すプロジェクトの1つで、例えば、ほかにそれを通常級に戻すようなプロジェクトとか取組はまだ考えていることがあるのかをお伺いしたいと思います。

○教育支援担当課長 ありがとうございます。戻すというよりは、皆同じ環境で過ごすことができる環境を整えていくということがメインであるのです。ですから、それでもえびな支援学校とかがなくなるわけではなくて、地域の学校で過ごしたければ、地域の学校ではこのような支援が受けられますから安心してください、このようなことができますよ

ということを保障していく。

つまり、先ほど包摂性が高いというお話があったのですが、誰もが地域の学校の地域の教室、地域の学校で過ごすことができるための包摂性を高めていくというところが根本の部分になってくるとは思います。

○海野委員 先ほど武井委員さんもおっしゃっていたのですが、人数が増えているというのは、もともとお持ちだった悩みを皆さんの努力で声に出しやすくなって増えてきていることと理解して良いのかということと、あと、支援シートがあったかと思うのですが、そちらのほうで、ご家庭の状況、お子さんの状況をいろいろ確認されているということなのですが、やはりお子さんの状況も大事ではあるのですが、保護者のほうも相当の心の負担というのは出てくるので、そういったところにも配慮していただけると良いのかなというところをお願いしたいと思います。

○教育支援担当課長 後のほうの保護者のことというところではあるのですが、それは当然でありまして、多分、保護者の方々から言うと、例えば、通常級に行くのか、支援級に行くのか、支援学校に行くのかとか、障がいのこととか、心を痛めたり、いろいろ悩まれているところがあると思うのです。ですから、当然、保護者さんのお気持ちに、担任でしたり、支援員でしたり、そういう方々がしっかり寄り添いながらお子さんの支援について一緒に考えていくというような形態を取っていくと思います。

ですから、事務的に、あなたはこちらですよ、あちらですよ決めていくわけではなくて、ともにこの場面ではどのような支援をしましょう、こうやっていくためにはどういう支援が必要か、家庭ではこれをしましょう、学校ではこれをしましょう、療育のほうではこれをしましょう、それを一緒に話し合っていきましょうというスタンスで進めていくことができればと思っております。よろしくお願いします。

○濱田委員 武井委員も海野委員もおっしゃったように、データが非常に変わってきているというので、いろいろと活用されているなと思うのですが、1つは、えびなっこ支援シートについてなのですが、今年度、試行期間、来年度から通常導入していくというふうに先ほどご説明がありましたが、1学期、あるいは試行された段階で何か課題とか、あるいはそういう問題点というか、改善しなくてはいけないようなことは何か出てきたのか、それとも長い時間をかけてつくられたので、ほぼほぼこれでスムーズに導入できそうだというふうになっているのか、1学期間の動きを教えていただければと思います。

○教育支援担当課長 すみません、先ほどの1つ目の質問にお答えするのを忘れてしまい

ました。

支援ニーズが高まってきたというのは、全国的にも先日、国のほうも報道していましたが、非常に増えているというところはあるのです。やはりそこは意識が高まってきたというところと、そういう支援が必要なお子さんの選択肢がたくさん増えてきたので、選ぶことができるようになったというところが、海老名だけでなく全国的にそういう風潮があるので増えてきたのではないかと考えています。ただ、増えたからといって、では、親御さんたちのお気持ちはどうかというところはまた別の部分なので、そこはやはり先ほど申し上げたとおりだと思っております。

また、次の質問なのですが、支援シートの活用につきましては、試行は今進めているところではあるのですが、やはり障がいのあるなしのところだけではなく、例えば、不登校のお子さんに使う場合はどのように活用していくかというところが、課題としては挙がっております。ですから、この支援シート自体は自由記述の部分を多くしているので、いろいろな活用ができるような幅広いものではあるのですが、ただ、それを限定して使いたいときにどのように使う方法が良いかというところは、いろいろマニュアルなり、記入例なり、活用例をたくさん挙げる必要があるかなという課題は挙がっております。ありがとうございます。

○濱田委員 まさに非常に研究なさってつくられたシートですから、本当につくるのが目的じゃなくて、これを活用しなければ本来ではないと思いますので、ぜひ頑張って、よろしくお願いします。

○平井委員 ようやくインクルーシブ教室が設置されてきて、こういう形で子どもたちが学べる場ができてきたのは大変いいことだなと思います。本当に子どもたちが多様化していますので、いろんな場で子どもたちが学べるというのはすばらしいことだなと思っています。

今話を聞いていく中で、支援員や相談員、それから保護者との話し合いはされているのですが、子どもたちの思いがどういう形で生かされているのか。一番は子どもたちの思いが、いろんな場があるのですが、それは教師や保護者が子どもの気持ちに沿ったものであるのかどうか。子どもが本来学びたいというところで本当に学んでいるのか。その話し合いが今のところでは、見えてこなかったのです。きちんと子どもの思いを酌んだ上で、支援員、学校、保護者と話した上でどういう居場所が最適なのか、どこで学んだら良いのかということを決めていくことが大事だと思うのです。ですから、そのところが今どのよ

うになっているのか、お尋ねしたいと思います。

○教育支援担当課長 ありがとうございます。確かに大人目線とか、教師や保護者目線だと、こういう進路があって、こういう場所が良いだろうと大人は考えるのですが、直接のところ、お子さんがそれを望んでいるか、その状態にあるかというところはすごく大事なところだと思うのです。やはりお子さんの気持ちやお子さんの状況にどう寄り添っていくか。その話を誰が聞けるのか、誰だったら、そのお子さんの気持ちを聞くことができ、そして、それを親御さんや学校も含めたみんなでその気持ちを共有しながら進めていくことができるかというのは、おっしゃられるように一番大事な部分だと思っています。

なので、その部分はこちらのほうからも、支援室だったり、我々だったり、教職員の先生方にもそこを聞いていくことの大切さをPRしていかなくتهはいけないと思っていますし、保護者さんのほうにも、お子さんの気持ちを一番に考えて行っていきたいというところはコミュニケーションということの大切さを感じているところではあります。

○平井委員 もう本当に話し合いが必要なのですが、そこが一番だと思うのです。PRとか、そういう問題ではなくて、本質は何なのか。今回立ち上げたこのインクルーシブルームの本質は何なのか。そこのところに迫っていかないと、せっかくこの部屋を立ち上げて、本来の学びにつながるようにはいかないと思うので、もう1度、そのあたりは検証なりして、どういう形が良いのかを見定めて進めていっていただけたらと思います。

○内野市長 教育長から最後に締めていただきますが、私のほうから1つだけ。今、こどもセンターができていて、教育委員会の建物に子どもたちの保育、幼稚園、それから、子どもの健診とか、生まれてからずっと中学校まで。その横にえびり一ぶという形で、教育委員会は不登校の子を支援しています。今、わかば会館の再編を行ってまして、わかば会館は重度障がい者の居場所というか、入浴、それからフリースペースで交流ができるものなのです。それから、児童として重度障がい者の学園もあったりする。あそこを再編して、今、発達障がいと自閉症はすごく多くなっているのです。それが小学校に行くときにすごく悩む。そこで、あそこに自閉症とか発達障がい等の障がい疑わしいとか、そういうものについての保育園をつくろうと、今、計画をつくっています。これは2年後につくります。そのときに、専門家と、それなりの人たちが集まって保護者と相談をします。なぜかという、うちの子とは違うよとか、保護者が認めない場合が多いのです。そこを理解しないと、ステップアップで小学校へ行けないのです。小学校でどのように対応するかというのは、そこで決まっていくと思います。

私どもは、これについては、1週間、その保育園にいるわけじゃなくて、普通の保育園、幼稚園に行きながら、ケース・バイ・ケースでこの方は3日間はここに、週の2日間はこちら。それは海老名市で送り迎えを行って、いろんなケースごとの話を保護者として、小学校に入る前に、小学校でこういった選択肢ができたので、この部分では最高だと思うのです。

その部分がスムーズに行くような形を今後取りますので、保健福祉部と今の教育委員会とはもっと連携して、この問題について障がい児教育、障がい児保育とかいろいろありますから、そこを取り組んでいただかないと、幾らつくっても、それぞれのセクトで固まってしまうと全くできませんから、そのためにこどもセンターをつくったので、あそこは子どものための行政を司る、子どものための役所なので、どうかよろしくお願いしたいと思います。

あとは教育長、どうぞ。

○伊藤教育長 私の話が終わると、あなたたちの出番になるから、少し待っていてね。私は、フルインクルーシブ教育をやるのです。もうそれはやると決めて、誰ひとり取り残さない教育ということを教育大綱に示したのです。

少し話は飛ぶのですが、大人の人たちは分かるのですが、やまゆり園の事件は知っていますか。ある考えを基にした人が、障がいのある方々に対して事件が起こったことです。それを私は深く考えたときに、何でこんなことが起こるのかな、何でこういう悲しいことが起こるかなと考えたときに、これは多分、社会の教育のつくりが失敗したのだらうなと、自分の立場がそうなので思ったのです。

日本の教育は、子どもたちが、あるときまではずっと地域の人たちがみんな同じ場所で教育を受けていたのです。でも、分離教育といって、例えば、障がいによって分ける教育に進むか、ヨーロッパや欧米のように、それでもみんなが一緒に教育を進めるかという分かれ道があったのです。そのときに日本は分けることを選択したのです。だから、ゼロ歳から学校に入るまでは、みんな社会で一緒に生きているのに、学校に入ったら急に分かれちゃうのです。でも、これは日本だけなのですよ。ほかの多くの国々では、それでも一緒なのです。すると、大人になっても一緒なのです。そこがずっとつながっているのです。

だから、日本の教育の中では人が区別されていることが当然のようになるのです。するとそこに、知らないうちに優劣というか、どっちが上かとか、どっちが下かとか、そういう感覚が身についてしまうのです。これが今の教育のすごい落とし穴なのです。私はそれ

は絶対にいけないから、できるだけみんな同じところで、同じ学校で、どんな障がいがあるだろうが、どんな事情があろうが、どこの国から来ても、例えば、耳がうまく聞こえなくても、目がうまく見えなくても、その人たちがみんないつも同じ場所で生活しているという空間をつくらないと、多分、日本が目指す、神奈川県が目指す共生社会は実現しないと思っています。

その第一歩を少しでも広げるために学校の包摂性として、学校にできるだけ多くの人たちが迎えられるような、そういう学校をつくり上げようということで、もう市長の理解は得ましたので、これから進みますので、皆さん、よろしくお願いします。それがインクルーシブ教育ということです。

○内野市長 基本的に、言葉は難しいですが、障がいがあってもなくてもみんな一緒なのだよという教育なのだよね。それが当たり前ののだよ。それが分けてしまうからこうなってきたという話だと思います。

これから学校の先生になられる人もいるし、社会に出ていく人もいらっしゃるのですが、はっきり言って、皆さんの年代は意外と差別がないのです。障がい者に対して差別があるのは、私たちの年代の上。だから、特別扱いしてしまう。うちの子どもや孫も障がい者を特別扱いしない。普通に接します。普通のことをやると、障がいがあるから、少しやると立派だ、立派だと学校はほめるのですが、うちの子どもたちは普通だと言うのです。普通に接するけれど、寄り添う気持ちを持つ。それが大事だと私は思っていますので、これからもよろしくお願いします。

それでは、第1部をここで終わりにして、あとは事務局に移します。

○教育部次長 内野市長、どうもありがとうございました。以上で第1部を終了とさせていただきます。

この後、次第4にあります学校発表に移りたいと思いますが、会場準備がございしますので、約15分間休憩ということで、11時10分程度を目安に再開とさせていただきます。よろしくお願いします。

(第2部 学校発表)

○教育部次長 中央農業高校のみなさん本日は本当にありがとうございました。以上でお

時間となりましたので、令和5年度第2回総合教育会議を終わらせていただきたいと思います。海老名市の教育委員会でインスタグラムを行っているのですが、その中で使わせていただければと思います。もしも不都合がある方がいらっしゃいましたら、後ほど教育委員会の者にお声かけいただければと思います。よろしくお願いいたします。

次に、お知らせです。冒頭、教育長よりお話がありましたが、本日中央農業高校の皆様のご厚意によりまして、校舎の入口でたまごと野菜の販売がごございます。是非ご購入いただければと思います。数に限りがあるということですので、早い者勝ちになってしまいますけれども、よろしくお願いいたします。それでは、以上をもちまして、令和5年度第2回総合教育会議を終了とさせていただきます。皆様ありがとうございました。